

学修成果の可視化を通じた卒業時の質保証の取組

東北公益文科大学
公益学部長 神田直弥

1 はじめに

東北公益文科大学では、2016年度の事業採択を受け、2017年度から3か年の中期計画である第2期吉村プランの柱として教育改革を進めてきた。学習者中心の大学として、学生の成長につながる取り組みを積極的に推進してきた。ここでは主要な取り組みと本事業の成果について報告する。

2 学外学修の推進 —クォーター制の導入—

セメスター制に加えてクォーター制を導入し、履修科目を減らし集中的に取り組む環境を整えた。2019年度は約70%の科目をクォーター制で開講している。第2クォーターへの必修科目の配置を避け、第1クォーターは学内で科目を履修し、第2クォーターは学外に出て長期インターンシップに取り組んだり、夏休みと合わせた期間で中期留学を行うなど、長期間の学外学修が可能となった。1年次の第2クォーターで長期の学外学修に取り組むギャップイヤー入試も実施している。また、一つの科目を週2回の進度で履修するため、集中した学修が可能となった。

3 アクティブラーニングの推進 —105分授業の導入—

2018年度より、学部の授業時間を90分から105分に変更した。これにより1回の授業でグループワークやプレゼンテーションなどの学生が主体的に取り組む時間を多く設けることが可能となった。また、授業期間が半期で16週から14週に短縮となったことから、長期休業期間を長く確保することができ、結果的に短期のインターンシップや各種実習、短期語学留学等の時間を確保しやすくなっている。短期インターンシップの参加者については、2016年度は103名であったが2019年度には200名となり、ほぼ倍増している。

4 授業外学修の推進 —ラーニングコモンズの新設—

学内にラーニングコモンズを新設し、学生がともに学びあう機会を提供することで学生の取り組みの量的な充実を図った。利用する学部生の学習支援や情報機器の操作補助は大学院生が担い、サポート体制の充実を図った。また、シラバスにおける授業外学修の記載を充実させ、学修に取り組みやすくした。結果的に、1週間当たりの授業外学修時間は、2016年度の12.9時間から2019年度では17.4時間に増加した。一連の取り組みの結果として、GPAの平均値も2.24から2.68*に向上した。*2018年度

5 学修成果の可視化と発信 —ルーブリックの開発とディプロマ・サプリメントの発行—

ディプロマ・ポリシーに定める4つの力のより具体的に定義するため、FD、卒業生への調査を通して因子構造を求め、産業界からの意見聴取を踏まえて「公益大22の力」として制定した。その上でルーブリックを作成し、就職先やインターンシップ受け入れ先等を対象に、入社段階で求められる水準を調査し、春学期開始時のガイダンス等で学生に周知し向上意欲を喚起している。

今年度からはディプロマ・サプリメントの発行を開始している。単位修得状況、GPAの推移、ディプロマ・ポリシーに定める力の獲得状況のGP値等を記載するもので、在学生に対しては同様の内容のプレディプロマ・サプリメントを発行する。学生の取り組みの振り返りと目標設定に活用していくことになる。